ストライクウィッチーズ　～天翔る狼達の奮戦記～

ティルピッツ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仕事中の事故で命を落としてしまった１人の男……

人生の終わりを迎える筈だった彼の前に、自らを”神”と名乗る者達が現れた。

神達は、彼に再び人生をやり直すチャンスを与えた。――だが、ただチャンスを与えた訳ではなかった。

彼は神達達と交わした”とある約束”の為に、もう一度人生をやり直す事になったが、彼が転生したのは日本が敗戦を経験せず連合国の一員としてドイツ第三帝国と戦う史実とは異なる歴史を歩む世界だった。

自らが知る歴史とは異なる世界に戸惑いつつも、彼は軍人としての己の使命の為に人生を歩んだ

世界中を巻き込んだ世界大戦の末期……軍人として己の使命を全うし、命を落とした男……

――だが、彼の人生はまたも終わりを迎えなかった……

「貴方にはもう一度人生をやり直してもらいます……――正確には、全くの別人として転生してもらいます。」
「それは一体――――」

地球とよく似ているが魔法が存在する世界……

突如出現した異形の敵…《ネウロイ》と呼ばれる謎の勢力によって、人類は圧倒されつつあった。
異形の存在には、通常兵器では力及ばず、圧倒的な戦力と瘴気の汚染による大陸侵略に為す術がなかった。

――――その力に対抗出来るのは、古くから異形の存在から人類を守ってきた少年少女達……魔女（ウィッチ）や魔術師（ウィザード）と呼ばれる存在だけであった……

「これは前回転生した世界よりも苦労しそうだ……」

そんな世界に現れた1人の魔女《ウィッチ》…彼女の行く末には何が待ち受けているのか…？

＊注意、この作品には以下の要素が含まれます。ご了承ください。
＊

①オリジナル兵器登場の可能性大
②独自設定
③1部ご都合主義

＊当作品は、《ストライクウィッチーズ　～天翔ル白狼の奮戦記～》のリメイクとなります。内容の大幅変更が行われています、前作の続編をお待ちの皆様、大変申し訳ありません。

目　次

序章
プロローグ　《大西洋沖海戦①》――――――――――――――――1

序章

プロローグ　《大西洋沖海戦①》

２０世紀は戦争の世紀と言える……

海に……陸に……戦火は絶えず、近代兵器の発達はその災禍を飛躍的に拡大させた……

照和（しょうわ）２５年　　大西洋

幾度も激戦の舞台となったこの大海では、この日も何度目か分からない大規模な戦闘が繰り広げられていた。

大小様々な軍艦が海上を右往左往しながら、艦上では盛んに砲煙が湧き出ている。上空には多数の航空機が飛び交い、それらに向けて海上の軍艦から猛烈な火線が伸び、時折その線に捕らえられ火球と化して墜落する機もいたが、大半の航空機は海上の軍艦に向けて攻撃を仕掛ける。

軍艦も航空機だけでなく、敵艦に向けて砲撃や魚雷による攻撃を盛んに仕掛け敵艦を沈めるが、敵の反撃をつけ大きな水柱で覆い尽くされる艦や大爆発を起こし、黒煙を履きながらその姿を海中へと没する艦もいた。

――　日本、アメリカ、イギリスの３カ国を中核とする連合国は、講和後を見据えて大西洋の制海権を失わない為に、多数の航空機や艦艇を大西洋に投入。

対するドイツ第三帝国改め神聖欧州帝国を中核とする帝国側も講話を有利にする為、大兵力を大西洋に送り込んだ。両者は大西洋上で激突。昼夜を問わないほどの大激戦が数日間にわたって連続で繰り広げられていた。

しかし、比較的補給が容易い欧州帝国軍と違って、補給線の確保が難しく補給面に難のある連合軍では、修繕に使う資材や武器弾薬が不足、更に昼夜問わずの戦闘で連合軍の将兵達は疲弊……

――そして、この日の欧州帝国軍の猛攻は何時にもまして苛烈を極めた

アメリカ海軍　　第６艦隊　旗艦　戦艦《フィルモア》

「重巡《ノーザンプトン》被弾！」
「《ヴィンセンス》被雷！速力低下！」
「第３８駆逐隊…被害甚大……！」
「くっ！……何隻やられた？」
「駆逐艦１２、軽巡及び重巡８隻が沈没。空母と戦艦はそれぞれ４隻ずつ失いました……」

「ヒトラーのクソ野郎め……っ……！……次から次へとっ！……一体どれだけの戦力を投入しているんだ！」

米第６艦隊司令長官　ウォルター・スコット大将は、自艦隊の損害を聞き、ヒトラーに対して悪態をつく。

連合軍の中でも比較的豊富な戦力を持つ米軍が率先して迎撃に当たっていたが、敵の数が尋常では無い程多く艦隊や航空部隊に大損害が生じていた。

「独海軍は旭日艦隊があらかた片付けたと思っていたが、その考えは甘かったようだな……」

「残念ながらその様です。敵戦艦４を含む２０隻あまりをを撃沈しておりますが、敵艦隊の総数はそれ程減っていません。」

日本の援英派遣艦隊…《旭日艦隊》の活躍によって欧州帝国海軍は何度も大損害を受けていた。にも関わらず、来襲した敵艦隊は多数のビスマルク級戦艦やシャルンホルスト級巡洋戦艦などの水上艦、様々な型式のＵボートで構成されていた。

「加えて敵航空部隊には例の巨人機も多数含まれている為、敵航空機による艦隊への損害も大きいです。」

「厄介だな……」

参謀の言う例の巨人機……《ドルニエ　Ｄｏ３１７　〝アース〟》は独空軍の切り札と言える超重爆撃機で、胴体や主翼、尾翼まで装甲が施された爆撃機であり、通常の航空機の機関砲ではその装甲を貫通出来ず、艦載機銃すらも通用しない程の非常に高い防御性能を持っていた。

「日本艦隊及び日本機が率先して迎撃しておりますが、英艦隊と空母

部隊が集中攻撃を受けています。」
「旭日艦隊を壊滅に追い込んだだけの事はあるという訳か……」

大西洋防衛の要でもあった《旭日艦隊》は相次いで”アース”による攻撃を受け中核戦力の《第一遊撃打撃艦隊》が壊滅し、残存艦も再度攻撃を受けて壊滅。
旗艦《日本武尊》及びその護衛艦数隻は、補給及び修理の為に大西洋から離れていたが、十数隻の日本艦は大西洋に残っており、米英艦隊と共にこの戦いに参戦していた。

「……各艦隊の損耗率は？」
「英艦隊及び我が艦隊の損耗率は３割を超えています。日本艦隊に至っては４割を超えています。」
「司令、このままでは全滅です。部隊を集結させ撤退すべきです。」
「しかし、それだと大西洋の制海権を失う事になる。それだけは避けねばならん。」
「ですがもう限界です。各艦隊や航空部隊は長時間の連戦で疲弊しており、これ以上組織的戦闘を行う事は不可能です。」

「そんな事は分かっている！だが、講和前に大西洋の制海権を失う訳には……っ！」

スコットも自軍の兵士達の疲弊状況を知らない訳では無い。だが、今撤退してしまえば大西洋の制海権は欧州帝国軍の手に堕ちる。それだけは何としても避けたかった。

「スコット司令！《蔵馬》の椎名少将より通信！」
「椎名司令から？繋げ！」
「はっ。」

通信士が通信回路を繋ぐと雑音混じりだが、男性の声が《フェルモ

ア》の艦橋内に流れる。

「??スコット司令??退却して下さい!?敵??は我々？引き受けます???!そ”の隙に撤退を!”??!」

「何を言ってるんだ椎名司令！たった数隻で敵艦隊相手に戦える筈がない！」

「”行ってくださいスコット司令!??このままでは全滅です？それでは大西洋を守る戦力が無くなる??我々がが時間を稼ぎます、その隙に撤退して体制を建て直して下さい”!???」

「しかしっ！」

「”時間がありません???長くは持ち堪えられません????行って下さい!???我々も隙を見て後退し合流します!?”!」

スコットは椎名少将が指揮する僅か数隻の日本艦隊では、欧州帝国軍を相手に戦えるとは思えなかった。それに戦って持ち堪えられたとしても、無事に撤退して自分たちに合流出来る可能性もゼロに近い。

「――――――――了解…したっ……殿を頼む椎名司令……。」

1分ほどの沈黙の後、スコットは椎名少将に殿として米英艦隊の撤退を援護するように要請した。

「??”了解しました??後で会いましょう??????”」

その言葉を最後に《蔵馬》からの通信は終わった…

沈黙が《フェルモア》艦橋内を支配し、参謀や乗員達はスコットに注目する。

「司令……」

「……通信士官、全艦隊及び航空部隊に命令！直ちに現海域から離脱！航空機は最悪放棄しても構わん！パイロットの回収を最優先だ！」
「はっ！」

スコットの命令を受けた米艦隊と英艦隊は帝国艦隊と航空隊への攻撃を続けながら、進路を変え現海域からの離脱コースを取る。

対して、椎名少将が指揮する日本艦隊は米英艦隊とは逆に帝国艦隊に向けて進路を取った。

「……済まない椎名司令……日本軍将兵の諸君……なんとか生き残ってくれ……っ！」

日本海軍　援英派遣艦隊所属　重巡洋艦《蔵馬（くらま）》

「英艦隊及び米艦隊、離脱して行きます。」
「スコット大将は撤退を決意してくれたか……」
「航行不能な損傷艦は乗員を救助して艦は放棄するようです。」
「ふむ……」

重巡《蔵馬》艦橋では、艦隊司令官椎名（しいな）幸雄（ゆきお）少将が、参謀らと共に離脱していく米英艦隊を見ていた。

「……敵艦隊及び敵航空隊の動きは？」
「再編成を行っているようです。敵艦隊は駆逐艦を先頭とした陣形へ。敵機は爆撃機や攻撃機ごとに再集結しています。」

「圧倒的物量で一気に叩き潰すつもりだな。」
「恐らくそうでしょう。如何致しますか司令？」
「真っ向から相手にしていては埒が明かん。敵の親玉を叩き潰す。」
「敵艦隊の旗艦に攻撃を集中させるという事ですね。」
「米英艦隊の撤退時間を稼ぐにはそれしかあるまい……」

彼が指揮する日本艦隊は、①《伊吹》型重巡洋艦の《伊吹》《蔵馬》。②《九頭竜》型軽巡洋艦の《九頭竜》《鶴見》。③《高瀬》型防空巡洋艦の《高瀬》《鳴瀬》。④《北風》型防空駆逐艦の《北風》《早風》《夏風》《冬風》の僅か１０隻で構成されていた。

５０隻もの大艦隊だった頃の援英派遣艦隊が僅か１０隻にまで減少し、旗艦でありシンボルの超戦艦《日本武尊》も”名将”大石　蔵良元帥も大西洋には存在しない……

「……勝てる見込みは限りなく低い……だが、ゼロではない。」

椎名少将はそう言うと制帽を被り直し、参謀や艦長達に身体を向けた。

「諸君、これより我が援英派遣艦隊は最期の戦いにその身を投じる。圧倒的に不利な戦況だ、諸君らを故郷の家族の元に帰してやれない可能性が高い……不甲斐ない俺を許して欲しい……」
「司令…頭を上げてください。」
「我々は最期まで司令官らと共に戦い抜くと決めたのです！軍人として悔いはありません！」
「確かに家族に会えないのは残念です。――ですが、二度と会えないとは思ってません！後世で愛する者とまた再会出来た様に…また会えると信じています……！」
「お前達……」

元々、援英派遣艦隊には前世からの転生者が多く在籍していた。椎名少将もその1人であり、援英派遣艦隊総司令の大石（おおいし）蔵良（くらよし）元帥もそうであった。

――これから絶望的と言える戦いに挑もうとしているにも関わらず、彼らは誰一人不安な表情をしていなかった……

「さて、諸君……奴らに我々援英派遣艦隊の底力を見せてやろう……たった10隻でも自軍の何倍のもの敵艦隊に打ち勝つ事が出来る事を証明しようではないか！」

「「はっ!!」」

「全艦、砲雷撃戦用意！目標敵艦隊！我々は……この戦いに勝つ！」

日本艦隊が絶望的な艦隊戦に挑もうとしていた頃、日本軍航空隊も米英航空隊の撤退を支援すべく決死の航空戦に挑もうとしていた……

「”――加東隊長！――正面に敵機…多数！――”」

「来たか……っ…！」

日本海軍航空隊指揮官加東（かとう）　正和（まさかず）大尉は、正面に見えた多数の敵機に対して息を呑んだ……

彼が指揮する日本海軍航空隊は、４個小隊１６機。噴式艦上重戦闘機《雷光（らいこう）》で構成されていたが、――対峙する帝国軍航空部隊は、噴式戦闘機と攻撃機、軽爆撃機や重爆撃機１００機以上から成る大部隊だった……

「１人１０機以上墜さないと互角にならないな……」

苦笑いを浮かべながら彼はボソッと呟く……

とても笑ってられる状況では無いが、少しでも気を紛らわす為に彼は苦笑いしたのだ。

――素人が見ても分かりきった戦いだ、１００機以上の敵機と自軍１６機では、まともな戦いにすらならない。あっという間に撃滅されるのが目に見えている。

「”――　加東隊長、指示をお願いします。―”」

無線越しに聞こえる部下の声はいつも通り冷静でハッキリとした口調で動揺した様子は全くない。

「よく出来た連中だ、相変わらず肝が据わってる。」内心そう感心しつつ、全機に向けて彼は指示を出した。

「全機に告げる。見ての通り敵さんは大団体だ。一人一人満足な歓迎が出来ないがまぁやれるだけやろう、好き勝手動かない様にしっかりとエスコートしてやれ。」

「”―要するに「いつも通りにやれ」って事でしょう？―”」
「”―隊長、柄にもないその言い回しはキツイですよ？何時もの口調で普通に指示を出せばいいのに……―”」
「五月蠅い、偶には言い方を変えてみようと思っただけだ。無駄口を叩く暇があるなら、敵に堕とされない様に注意してろ。」
「”―はいはい、分かってますよ大尉殿。―”」
「”―隊長もお気を付けて、油断は禁物ですよ？―”」
「……言われなくても分かってるよ……。――――全機、戦闘態勢！命は落とすな、敵を堕とせ！必ず生きて帰るぞ！」